

〔研究ノート〕

二つの展覧会と中国陶磁

—浙江省博物館の特別展『呉越勝覧』と ロンドンの『中国芸術国際展覧会』—

昨年9月末に、中国の浙江省博物館分館での『呉越勝覧—唐宋之間的東南楽国』展の開幕に合わせて、浙江省杭州市を訪れました。現在の浙江省を含む地域は、漆器が発見された新石器時代の河姆渡遺跡や玉器に代表される良渚文化など、古代からの文化を有する地で、五代十国時代には杭州を首都として呉越国が治めていました。展覧会は唐末から北宋時代にかけての呉越国に関わる文物が取り上げられており、浙江省内の文物だけではなく、呉越国を広く扱った特別展は浙江省博物館でも初めてであり、国際シンポジウムも開催されました(図1)。展示作品は工芸品が比較的多く、銀器などの金工や玉製品の他、定窯白磁、越窯青磁、阿育王塔(銭弘俶塔)、線刻鏡、

更に経巻類等が含まれていました。それらが作り出され、(奉納や埋納も含めて)使用された地に立ちながら鑑賞することは、大変興味深く感じられました(図2)。

展示作品の中には臨安市の銭寛墓や水邱氏墓から出土した副葬品が数多く含まれており、これらは唐時代末の高い工芸技術を今に伝えています。銭寛及び水邱氏は、呉越国を907年に正式に建国した初代国王である銭鏐の父母で、唐の光化三年(900)と天復元年(901)に亡くなっています。この墓の出土品には「官」字が刻まれた皿や金銀の薄い板で覆輪や装飾を施した水注など河北省の定窯白磁(図3、高15.7cm、底径5.8cm、臨安市博物館蔵)、細密な文様が刻まれた銀器などがあり、これらを見ると、この

時はまだ呉越国は建国されていませんが、銭鏐が河北地方との交易を含めた権力を所有していたことが窺えます。青磁で名高い越窯を始めとし、龍泉窯や温州市一带の甌窯など青磁窯が数多く築かれていた地域だからこそ、北方からもたらされた貴重な白磁が納められたと考えられます。

美術作品全般に言えることですが、中国陶磁の鑑賞も時代の美意識や社会的な背景、歴史的な出来事によって、その価値観は変化します。近年では、特に20世紀初めが一つの転換期であり、鉄道敷設に伴う洛陽周辺における唐三彩の出土や鉅鹿での磁州窯陶磁の出土、辛亥革命による清朝崩壊と美術品の流出が、中国陶磁への欧米や日本の関心を急激に高めるとともに、「鑑賞陶磁」という新たな陶磁器への価値観を生み出した経緯が、近頃活発に取り上げられています。大和文華館でも昨年冬の「中国美術コレクション展」では作品とともに中国書画や陶磁器などの箱書や添え状、模本、印刷物など、「美術品」がどのような賞賛や評価を経てきたかを知るための資料を僅かながら展示しました。それらは大和文華館のコレクションの中核となっている矢代幸雄の作品収集の性格を示すものでもありました。

中国美術への関心を高めた歴史的な出来事の一つに、イギリスのロンドンで開催された『中国芸術国際展覧会(The International Exhibition of Chinese Art in London)』があります。1935年11月末から1936年3月にかけてバーリントン・ハウスで行われたこの展覧会には、戦乱を避けて南遷していた紫禁城から出た美術品の他、日本からも作品が貸し出されました。『参加倫敦中国芸術国際展覧会出品図説』(商務印書館印行、1936-1937年)には4冊組で(1:銅器、2:瓷器、3:書画、4:其他類)故宮博物院を始めとする中国国内からの出品作品が掲載されています。矢代幸雄は会期中にロンドンを訪れており、

第二冊を見ると、大和文華の爲の中国陶磁収集において本展覧会が矢代に与えた影響がうかがえます。『私の美術遍歴』(矢代幸雄著、1972年、岩波書店)には、展覧会の会期中に陳列品中の傑作を毎週一点選んで特別陳列を行っており、その第一週に根津家所蔵の饗饗文方盃(重要文化財、殷時代、現根津美術館所蔵)が選ばれて、作品を中心に関係者と記念写真を撮ったことが記されています。図4はその時に撮影された写真と見られ、矢代幸雄は左から三番目、その他に、中国陶磁の蒐集家として知られ、展覧会のイギリス側委員長を務めたパーシヴァル・デヴィッド卿(Sir Percival David、左端)、スウェーデンのグスタフ6世アドルフ(Gustav VI Adolf、当時は王子、右から三番目)などが認められます。矢代幸雄はこの展覧会を機に、それ以降幾度となく中国を訪れるようになります。矢代が友人であったデヴィッド卿とどのような交流を持ったのか細かくはわかりませんが、現在大英博物館に展示されているデヴィッド・コレクションの中にある青磁瓶は、およそ15年後、矢代幸雄が大和文華館のために蒐集することになる青磁多嘴壺(図5、元豊三年(1080)銘)とともに同じ墳墓に納められていたであろうことが明らかにされており、この写真は二人の中国陶磁を通じた未来の関わりを暗示しているようにも見られます。

(図3は黎毓馨主編『呉越勝覧—唐宋之間的東南楽国』、中国書店、2011年10月、図4は畢宗陶「1935 敲開中国芸術宝庫」『典藏』221号、2011年2月から転載させていただきました。瀧朝子)

図1



図2



図3

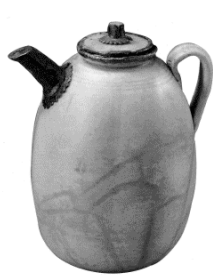


図4

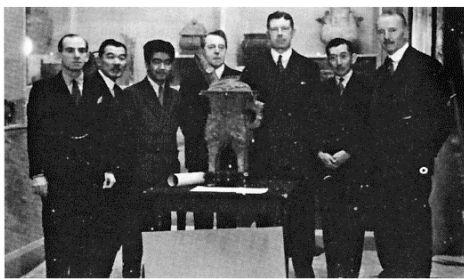


図5



図1 浙江省博物館主催シンポジウム開幕式 図2 宝石山頂から望む保俶塔と杭州市街、西湖 図3 水邱氏墓出土の定窯白磁水注 図4 中国芸術国際展覧会の矢代幸雄 図5 青磁多嘴壺